5章

【問題】（演習）

出典…王充『論衡』「問孔篇」／早稲田大学　文学部（第一文学部）　89年

書き下し文

世の儒学者、好んで師を信じて古を是とし、以為へらく賢聖の言ふ所は皆非無しと、専精講習して、難問するを知らず。夫れ賢聖筆を下して文を造るに、用意詳審なれども、尚ほ未だ尽くは実を得と謂ふべからず。況んや倉卒に言を吐くをや。安くんぞ能く皆是ならんや。皆是とする能はざるも、時人難ずるを知らず。或いは是なるも、意沈みて見難きに、時人問ふを知らず。案ずるに賢聖の言、上下相違ふこと多く、其の文、前後相伐つ者多し。世の学者、知る能はざるなり。凡そ学問の法は、才無きを畏れず、師を距み、道を核め、義を実にし、是非を証定すること難きなり。問難の道は、必ずしも聖人の生時に対るに非ざるなり。世の解説して人に説く者は、必ずしも聖人の教告を須ちて、乃ち敢へて言ふに非ざるなり。苟しくも暁解せざるの問有らば、孔子を追難すとも、何ぞ義を傷はん。誠し聖業を伝ふるの知有らば、孔子の説を伐つも、何ぞ理に逆はん。

現代語訳

世の中の儒者は、とかく師を信じて昔のことを正しいとし、賢人や聖人の語る言葉にはすべて間違いがないと思い込み、ひたすら学ぶだけで、批判し問うことを知らない。そもそも賢人や聖人が筆をとって文章を作る場合、心遣いが細やかでゆきとどいていても、やはりすべてが真実であるとは言えない。まして、にわかに発言する場合はなおさらである。どうして全部が正しいだろうか。全部が正しいとは言えないのに、その時代の人は批判しようとしない。あるいは（その発言が）正しくとも、真意が隠れていてわかりにくいのに、その時代の人々は問うことをしない。思うに、賢人や聖人の言葉は、上下でくいちがっていることが多く、彼らの書く文章は、前後で矛盾していることが多い。世間の学者は気がつかないのである。だいたい学問の道は、才能がないことを気にすることなく、師

（の説）を受け入れず、正しい道理を追求し正しい筋道を明らかにし、是非を証明し決定するのが難しいのだ。問うて批判するやり方は、必ずしも聖人の生存中に行わなくともよい。（なぜなら）人に説く世の解説者は、必ずしも聖人の教えや告示を受けて、はじめて発言するとは限らないからだ。もしも理解できない問題があれば、孔子をその死後に批判しても、どうして義を損なうことになろうか。もし本当に聖人の業績を伝えられる知能があれば、孔子の説を攻撃しても、どうして道理に逆らうことになろうか。

解答

問1　いづくんぞよくみなぜならん（や）。〔現代仮名遣いでも可〕／いづくんぞよくみなぜとせん（や）。〔別解〕

問2　(ウ)　**問3**　(イ)　**問4**　(ウ)

【問題】（自習）

出典…李斯『上書秦始皇』／センター試験　追試験　89年

書き下し文

今人を取るは則ち然らず。可否を問はず、曲直を論ぜず、秦にあらざる者は去らしめ、客為る者は逐ふ。然らば則ち是れ重んずる所の者は、色・楽・珠玉に在りて、軽んずる所の者は、民人に在るなり。此れ海内に跨がりて、諸侯を制する所以の術にあらざるなり。

臣聞く、「地広き者は粟多く、国大なる者は人衆く、兵強き者は則ち士勇む。」と。是を以て太山は土壌を譲らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を択ばず、故に能く其の深きを就す。王者は衆庶を却けず、故に能く其の徳を明らかにす。是を以て地に四方無く、民に異国無く、四時美を充たし、鬼神福を降す。此れ五帝三王の敵無き所以なり。

今乃ち黔首を棄てて、以て敵国を資け、賓客を却けて、以て諸侯を業け、天下の士をして退きて敢へて西に向かはず、足を裹みて秦に入らざらしむ。此れ所謂寇に兵を藉し、盗に粮を齎す者なり。

夫れ物の秦に産せざるも、宝とすべき者多し。士の秦に産せざるも、忠を願ふ者衆し。今客を逐ひて以て敵国を資け、民を損なひて以て讎に益し、内は自ら虚しくして、外は怨みを諸侯に樹つ。国の危き無きを求むるも、得べからざるなり。

現代語訳

今、（陛下が）人材を登用なさる場合そうではございません。（その人物の）適不適をお調べにもならず、良い人物か悪い人物かをも論じなさることなく、秦人でなければ受け入れず、外国からの客ならば追放なさいます。となれば、（あなたの）重視なさるものは女色・音楽・宝石類、軽視なさるのは人々ということになります。これは、天下を支配して諸侯を制圧する方法ではありません。

私が承りますところでは、「土地が広いと穀物の収穫が多く、国が大きいと人口も多く、軍隊が強いと兵士は勇気を持つ」とされております。このために、太山は一かけらの土をも他に譲らず、ゆえにあの大きさを完成できたのです。黄河や海は細い流れをも選り好みせずに受け入れ、ゆえにあの深さを完成できたのです。王者は庶民の意見を退けずに受け入れたために、あの徳を明らかにできたの

です。そのために、王者の国土には四方に国境がなく、民衆に（自国・他国の）区別がなく、四季は美しさに満ち、神々も福をくださいました。これが五帝三王に敵が存在しない理由でございます。

ところが今、陛下は民衆を捨てて、敵国に利益を与え、外からの大切な客を追放して諸侯を助け、天下の士に尻ごみさせて西方の秦に向かわせず、足留めをして秦に入らせないようになさっておられます。これは世間でいう「強盗に武器を貸してやり、泥棒に食物を届けてやる」ことでございます。

そもそも物には、秦の産物でなくても宝とするにふさわしい物がたくさんあります。士にも、秦の出身でなくても秦のために忠誠を尽くしたいと願う者はたくさんいます。陛下は今、外の客を追放して敵国に利益を与え、民衆（の数）を減らして秦に敵対する国を援助し、自分から国内をからっぽにして、国外では諸侯に恨みの種を作らせようとなさっています。これでは、国が危うくないようにと願われましても、とうていできることではございません。

解答

問1 (エ)　問2 (ウ)　問3 (イ)　問4 (オ)

問5 (ア)　問6 (ウ)　問7 (エ)　問8 (オ)

解説

問1 傍線部の解釈問題であるが、文法的に問題となる語句はないので、本文の内容からその意味を考える。(a)の次の行で、「是所レ重者、在二乎色・楽・珠玉一、而所レ軽者、在二乎民人一也。」と述べられているところを押さえれば、この段落で、筆者は秦の始皇帝の政策のうち、「人を軽んじている」ことを批判しているものと読み取れる。それが傍線部を含む「今取レ人則不レ然。」という批判の真意である。したがって、ここで筆者が「不レ然」と批判している傍線部(a)の内容は「人を扱うこと」一般であると推測できよう。これを国家の政策に即して言うなら、「人材の登用」ということになる。この意味合いを最も忠実に反映している選択肢は(エ)。(ア)や(イ)や(オ)というように、ネガティヴな内容だけに限定されているものではない。また(ウ)も限定されすぎている点で(エ)に劣る。

問2　単語の意味の問題。前の**問1**で、この段落での意見が「人材の登用」に関するものであることがわかっていれば、ここでの「曲」が人格についての適否を述べている文脈であることも容易に読み取れよう。だとすればここでの「曲」は「正しくない・よろしくない」の意。選択肢の中では㈠がこの意味に当たる。「曲学阿世」（＝学を曲げて世におもねる）の四字熟語にもあるように、「曲学」とは「真理をねじまげること」の意味である。㈠は「旋律・メロディ」の意、㈡と㈤は「微妙な・細かな」の意、㈢は「芝居・演劇」の意。

問3　本文の内容説明問題。傍線部(c)よりは傍線部(d)の方が直接の手がかりになるだろう。ここの「不レ択」とは「択ばず」＝「選ばない」ということ。だとすれば㈠は全く逆で、㈡が正しいということはすぐに読み取れるはず。㈢・㈢・㈤についても、いずれも「選ぶ」ニュアンスを持っている点で不適当。この傍線部(c)・(d)と、続く「王者不レ却二衆庶一」との三つを合わせて、ここで筆者は「選り好みをしないこと」が大国を安泰に保つ秘訣だと訴えているのである。

問4　基本的な句形の問題である。センター試験の漢文においては毎年一問前後、出題されている。傍線部のような「不敢～」は「あへて～ず」と読み、「無理に～しない」ぐらいの意味になる。これを「敢不～」とすると「あへて～せざらんや」という反語形になり、「どうして～しないだろうか、いや、～だ」という意味になる。

問5　傍線部の内容説明問題。傍線部(f)を直訳すれば、「強盗に武器を貸し、盗人に食糧をあげる」ぐらいのことである。つまり「敵を助ける」意味合いである。この点で㈢・㈤はカットできる。㈠～㈢の見きわめにあたっては、「自分が不利になる」（＝㈠）のか、それとも「有利になる」（＝㈡）、「助けてもらおうとする」（＝㈢）なのかを見比べていけばいい。これは傍線部の前行（本文８行目）で「今乃棄二黔首一、……」とされているように、秦の始皇帝の政策を批判している文脈であることに鑑みて、㈠を採るのが妥当だろう。㈡・㈢であれば直接には批判の対象にはならないはず。

問6　傍線部の解釈問題。傍線部(g)の後半の「不レ可レ得也。」に着目し、「得ることができない」ニュアンスをつかめれば、選択肢は㈡・㈢の二つに絞れるだろう。あとは文脈から、ここでの「求」が文字どおり「探し求める」（＝㈡）のか、それとも気持ちの上

で「願う」（＝㈠）のかを見きわめていけばいい。ここでは、傍線部の直前で「内自虚、而外樹二怨諸公一。」とされていて、国の内政・外交が安定しない状態が述べられていることを押さえるべき。この流れで言えば、傍線部は「国が安定した状態を願う」と捉える方が、「危うくない国を探し求める」と捉えるよりは自然だろう。

問7　主旨把握の問題と考えればいいだろう。結局のところ、この文章で筆者（李斯）が秦の始皇帝を批判している中心のポイントは、**問1**で検討したような「人材の登用」についてである。これを押さえるだけで選択肢㈤が選べる。㈠は㈤の内容を逆から述べたものだが、これだけを読むと「快楽にふけっている」だけで何をしないからダメなのかが説明不足である。㈢は全くこれとは逆なので不可。㈡は近いが、ここだと本文6行目の「是以地無二四方一、民無二異国一。」だけを取り上げたものにしかならない。この部分は直接の主張ではなく、秦の始皇帝の施策を批判するために、「五帝三王」の事績を取り上げて述べ立てた部分である。㈥も同様に、第二段落（本文4行目以下）で述べられている政治一般論であり、ここでの始皇帝を対象とした批判の文脈からするとややピント外れ。

問8　漢文文学史に関しての出題も時折見られるので注意が必要だろう。これは基本的な知識の部類に入る。法家は㈥。㈠と㈡は「儒家」、㈢は「道家」、㈤は「兵家」である。

●メモ●

練習問題　解答

1　天下の理、其の自る所を原ぬれば、未だ不善（善ならざる）有らず。

2　又悪くんぞ君子小人を其の間に取らんや。

3　夫れ金鼓旌旗（なる者）は、人の耳目を一にする所以なり。

4　天の人をして食を甘しとし、色を悦しとせしむるは、天の仁なり。

5　虎豹の能く人に勝り獣を執ふる所以（の者）は、其の爪牙を以てなり。

6　人の知るべき所を知り、人の能くすべき所を能くす。

7　未だ曾て見ざるの書を読み、未だ曾て到らざるの山水を歴む。

8　能く禍を未だ形れざるに消し、将に亡びんとするに救ふ。

9　人君但だ当に力を其の当に為すべき所に竭すべきのみ。

10　夫れ人主は己を愛するを愛せざる莫し、而れども己を愛する者の愛するに足らざるを知る莫し（莫きなり）。

LCR
読解のための漢文法

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製